

国際交流

平成 9 年 9 月 30 日 創刊
 平成 25 年 11 月 30 日 発行 (第 32 号)
 二松学舎大学国際交流センター (学生支援課)
 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16
 Tel: 03-3261-7427

◆目次◆

国際交流センター長に就任して
 国際交流センター長 武永尚子 1
 海外協定校教職員相互訪問制度による北京大学訪問について
 国際政治経済学部 田端克至教授 2
 海外協定校教職員相互訪問制度に基づく教職員の来訪 2
 派遣留学修了報告
 文学部 4 年 江原郁 (成均館大学校派遣) 3
 文学部 3 年 増田遙 (成均館大学校派遣) 3
 夏期中国語・歴史文化研修実施報告
 文学部 3 年 村澤菜摘 4
 夏期オーストラリア語学研修実施報告
 国際政治経済学部 4 年 大久保拓 5
 交換留学生留学修了報告

北京大学 李宇恒 6
 中国文化大学 張楷培 6
 中国文化大学 劉雨瑄 7
 平成 25 年度 交換留学生制度 8
 国際交流センターからのお知らせ 8
 第 2 回 TOEFL-ITP (団体割引での TOEFL 受験)
 第 10 回 外国人留学生日本語スピーチコンテスト
 国際交流年末懇親会
 編集後記

国際交流センター長に就任して

国際交流センター長 武永尚子



今年 4 月に国際交流センター長に就任いたしました。実は以前もこの職を担当したことがあり、何となく古巣に戻った気持ちがしています。しかし、その頃に比べて留学生数は

半分以下に減少していますし、国際交流センターの職員も学生支援課と兼任と言う厳しい現実があり、のんびりしているわけにはいきません。二松学舎大学がこれから外国人留学生に留学先として選ばれる大学になるにはどうすべきなのでしょうか。また国際社会に通用する日本人学生を育成するにはどうしたらよいのでしょうか。これから国際交流センターのスタッフと一緒に模索していきたいと思っています。

国際交流センターの任務は海外協定校との交流、夏期語学研修の実施、本校に在籍する外国人留学生のサポート、本学学生の外国留学に関する支援などが柱となっています。

夏期語学研修は 1996 年以來毎年北京大学で 3 週間実施しており、これまでに 400 名近い学生が参加していま

す。その中には卒業後中国語の教員になった者もいますし、中国語を使ってビジネスで活躍している者もいます。しかし、開始以来 18 年間、日本も、中国も、北京大学も大きく変わりました。そろそろ語学研修の実施形態を抜本的に改革する時期が来ているのではないかと考えています。オーストラリアの語学研修は英語の先生のご尽力もあり、本年度 10 数年ぶりに再開されました。今後、さらに韓国での韓国語語学研修も実施に向けて検討を始めたいと思っています。

国際化が叫ばれている現在、本学はまだ国際化に対応できる体制ができていないとは言えません。外国人留学生、最近増加の傾向にある外国籍の学生および異なる国籍の両親の間に生まれた学生のなかには、日常会話ではまったく不自由はしなくても表現力に問題がある場合が多々あります。そのような学生に対する日本語教育のサポートも国際交流センターの仕事ではないでしょうか。また、一般の学生が外国に留学して、現地で生活することによって国際感覚を磨くことも必要です。本学在学中、協定校はもちろん、協定校以外の大学にも、長期であれ短期であれ、積極的に留学できるよう情報の提供も心掛けて行きたいと思っています。

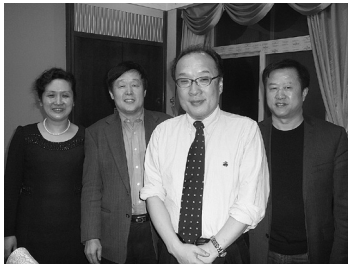
皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成 24 年度 海外協定校教職員相互訪問制度による北京大学訪問

平成 13 年度から始まった北京大学歴史学系との海外協定校教職員相互訪問制度は、平成 24 年度で第 11 回目を迎えた。今回、本学の派遣教員として国際政治経済学部部の田端克至教授が、平成 25 年 3 月 6 日から 11 日までの 6 日間を訪問した。

中国北京大学での講演

国際政治経済学部教授 田端 克至



歴史学系の歓迎会

今年も、本学と北京大学歴史学系との交流協定にもとづき、「例年通り」、北京大学での研究交流が行われた。熱心な北京大学の大学院学生など学生諸君向けに、講演した。

「例年通り」、「通常通り」、この言葉、特に今年の北京大での講演では意味深い。少なくとも、私は、かなりこの言葉の有難さを実感した。

日中間には、尖閣、PM 2.5、歴史認識の問題など、様々な政治的課題がある。正直言って、私は関心がない。正確に言えば、関心を持ちたくない（その理由を誤解されないよう、きちんと論ずるには紙幅がなさすぎるので割愛するが）。

ただ、当地に行けば、こうした話はあるであろうと覚悟はしていた。領土問題など質問されれば、相手が納得する程度の反論も準備して、講演に臨んだのである。

タイトルは「中国经济とバブル—中国は日本と同じ歴史を辿るのか—」である。どうしてこんな刺激的なタイトルを選んだかと言えば、私が現在、科研費を使って共同（早大、上海大）で研究しているテーマの一つだからである。半年前、我々の研究グループが中国の学会で発表したところ、かなり評判になった。中国の研究者レベルでは、中国はバブルであることでコンセンサスがあるようである。このバブル、どのように収束するのか。不毛の 20 年を経験した日本と同じ道

を辿るか否か（これを日本化と呼ぶ）。日本化は、最大の関心事の一つである。

歴史と伝統を持つ北京大学ではどうなのか。研究者ではない、一般の学生はどう反応するのか。私は、彼ら若者の反応をみたかった。結果を言えば、かなり、関心を持って聞いて頂いたようである。日本と中国、異なるように見えて、かなり共通した経済的な課題を持っている。日中だけでなく、アジア全体が共通した成長のパターンを持っており、成長のスピードは速いかもしれないが、持続性に課題があること、この高い成長の最終局面では、金融バブルが発生することを、理論モデルなどを使わずに、できるだけ平易に伝えたのである。「もはや、バブルは中国だけでなく、フィリピン、タイ、インドネシアなどアジア全体に拡散しており、成長の最終局面とも思われる兆候をしめしている。」などと、研究成果を披露した。金融機関の方や経済系の大学院の方もおり、これまた予想された通りの「通常通り」の反論があり、無事終了した。

政治的には複雑で厄介な問題が存在する。しかし、経済的な切り口で見ると、日中の立場は単純である。両国には、お互いに真摯に協力して行くことで、互いの利益になる共存共栄の研究分野、ビジネスが多数存在するのである。私の言いたかった「平凡で通常通り」の結論、なぜか、とても有難く感じられた。おそらく、私の話を聞いていた北京大学の学生諸君も、同じ気持ちであったのではなかろうか。次年度以降も、北京大学との交流が通常通り行われることを、心から祈っている。



北京大学のキャンパス内

平成 24 年度 海外協定校教職員相互訪問制度に基づく教職員の来訪

平成 25 年 3 月 15 日～ 20 日の日程で、北京大学歴史学系より、宋成有教授と呉芳夫人が本学を訪問された。日本史、韓国史、東北アジア史が専門の宋教授は、本学が平成 11 年に歴史学系と交流協定を締結後、本学に訪問されたこともあり、今回が 2 度目となる。学長への表敬訪問では、流暢な日本語で「再び二松学舎大学に来られたことに感謝したい。」



記念講演の様子

のご挨拶。「インターネット時代と中国における日本史研究」と題した記念講演では、中国でのインターネットの普及過程から、日本史研究がどのように活用されているかを分かりやす

く丁寧に紹介され、参加した学生 14 名が熱心に耳を傾けた。

また、宋教授ご夫妻の希望により箱根へと足を運び、雄大な春の富士山や旧跡見学を堪能。宋教授は学生や教職員との交流を楽しみ、6 日間の訪問を終えられた。



学長室にて表敬訪問

後列左より、吉崎一衛副学長、武永尚子教授
前列左より、呉芳夫人、渡辺和則学長、宋成有教授

派遣留学修了報告



語学堂の卒業式にて

韓国・成均館大学校

文学部 4年 江原 郁

私にとって留学とは、様々なことを気づかせてくれる経験でした。留学を決意したのは大学3年生春のことでした。教育実習を控えている私にとって、1年間の留学は容易ではなく、卒業を1年延ばさなくてはならないため、周囲からは「そこまでして行く必要があるのか」という声もあがりました。もちろん、異文化を理解したい、外国の教育を見たい等様々な理由がありましたが、一番の理由は、取り柄のない自分に誇れるものが欲しいということだったのかもしれない。

留学したいという私に父は2ヶ月間、口をきいてくれませんでした。「行くなら説得できるだけの準備をしろ」という反対に、初めて私は具体的に説得をするための準備を始めました。今考えたらその時の父の反対があつて良かったと思います。私にとって留学始めの半年間は辛いものだったからです。きっとこの時の反対がなかったら途中で投げ出していたと思います。

はじめの私の語学力は自己紹介ができる程度で、韓国人の友達も、外国人の友達も、日本人の友達すらできませんでした。初めて両親から離れ、知り合いがいないということは、時間が経つにつれて大きなストレスになりました。交換留学生のガイダンスは全て英語でされましたし、配布物も全て英語でした。そのため、韓国語も英語も全く出来ない私は誰かに頼るしかなく、不安と情けなさで神経質になっていたようです。いわゆるカルチャーショックです。些細なことで傷つきよく泣きました。親にも、二松学舎の先生方にも、ルームメイトにも多大な迷惑をかけました。そんな中でも帰国したいと言わなかったのは父親の反対があったからです。「あれだけ我侷を言って来たのだからがんばらなきゃ」と責任感が私を動かしていたのだと思います。

そんな苦しい中でずっと親身になってくれたのは、同じ境遇の他国からの留学生たちでした。彼女たちは私の悩みを親身になって聞いてくれ、逆に彼女たちも困ったことがあると相談しにきてくれました。私が寂しがっている時にはこまめに連絡をくれ、時には寮で語り明かしたこともありました。同じ留学生で、きっと似たような悩みも持っていたのだと思います。もちろん語学力の向上や慣れもありましたが、同じ留学生の彼女たちが私を大切にしてくれたお陰で私はカル



語学堂のクラスメイトと（筆者・中央）

チャーショックから立ち直り、初めて自分の足で立つことが出来たのだと思います。

「自立」とは日本にいても必要だといわれることですが、韓国にきて初めてこの大切さを痛感しました。学生ですから経済的にはまだ難しいかも知れませんが、精神的に自立していないと何も出来ない、心からの友達もできないし、学業だって上手くいかない。これが留学というものだと思います。私は最初、この部分が一番できていなかったのだと思います。自分が堂々としていれば相手の態度も変わりますし、自分が親切にしていれば相手も自分に親切にしてくれるでしょう。私は友達によって「自立」させてもらいました。

また、日韓問題は常に両国間にありますが、「自立」という考えを持ってから肯定的に考えられるようになりました。留学前は日本が正しい、韓国は間違っていると思っていました。しかし、自分に余裕が出てきて、相手の話が聞けるようになったとき、相手の立場でもこの問題を見る事が出来るようになりました。

韓国に留学すると言ったとき、どうしてもっと親日的な国に行かないのかと言われました。しかし、韓国を選んで良かったと自信をもって言えます。政治的、歴史的に両国に問題がある国だからこそ、一生懸命考え、理解しようとしたお陰で学べる事が多かったです。数年間の長期留学をした場合のカルチャーショックに比べたら、私が感じたカルチャーショックはほんの少しの部分だったのかもしれない。語学もまだまだ未熟な部分が多いですし、みんなが思う格好良く、すごい留学とはかけ離れていたと思います。しかし、この一年の経験は私に、ここでは言い尽くせないほど様々なことを教えてくれました。きっとこの先の人生にも大きな影響を与えてくれると思います。最後になりましたが、留学を許可してくれた家族、たくさん助けてくださった国際交流センターの方々、先生、友人に感謝します。

韓国・成均館大学校

文学部 2年 増田 遥



語学堂のクラスメイトと（筆者・左）

長年続けてきた韓国語。学べば学ぶほど難しさを感じ、壁にぶつかり悩んでいた一年生の春。この先レベルアップを図る為に今の自分にとって何が必要なのかと考えて

いた時に、本学の派遣留学生の募集を目にし「これだ！」と思い留学する事を決めました。

留学は私にとって初めて長期で親元を離れての生活である上、お隣の国と言っても海外での生活だったので、自分で決めた事とは言え、決まったばかりの頃は上手くやっていたかとても心配でした。しかしビザの手配や留学に向けての準備をしていく中で、留学するのだという自覚が湧いてきて、行く頃には決意と希望を胸に留学生活をスタートさせました。

最初の一か月は毎日が新しい事だらけで、慣れるまでは何処へ行くにも何をやるにも緊張していました。日本で勉強してきたとは言え、教科書や本で主に勉強した韓国語。日常生活で使う生きた韓国語ではなかったのが、現地で自分の実力はどこまで通用するのかとても不安でした。日本では別に何でもない買い物ですら、ドキドキしながら行く事が多かったのです。

そんな状況が打開できたのは協定大学の語学堂に通い始めてからでした。語学堂の授業は会話と文法に分かれていましたが、双方を学習したらその場で使って理解するというスタイルでした。頭で理解出来ても実際に使ってみるのはなかなか難しく、失敗する事もよくありましたが、毎日韓国語を使う事で段々と勘も働くようになり、少しずつ自信を持てるようになりました。自分の思いを伝えられるようになると、自然に何事も積極的に取り組めるようになり、だんだんと充実した生活を送れるようになっていきました。

その頃になると、少しずつ自分の成長が感じられるようになっていきました。一番驚いたのは買い物の時、値切り交渉をしたり、お店の人と立ち話しながら打ち解けたり出来るようになった事でした。小さな進歩ですが、数か月前の自分では考えられない事だったので嬉しかったです。よく考えてみると、単に語学的なレベルが変わっただけでなく、私の場合は性格にも変化が現れたように思います。留学前より積極的になり、物事に対する好奇心が強くなりました。自分の新たな一面も発見出来て、留学は最後まで良いこと尽くしかのように思えました。

しかし、日韓には深い歴史的背景がある為、一時期は互いの国に対する考え方や思いの違いを感じ、難しさを感じる時

期もありました。その時、留学する事は単に言語や文化を学ぶだけではなく、本当の意味でその国の事を知っていく事も大切なことだと感じました。

学校生活に余裕が出てきた頃には、もっと色々な事を経験して自分の視野を広げたいと思い、国内のあちこちを一人旅し、文化行事にも参加しました。韓国の歴史、文化等を直接見聞きする事で、色々な事を感じる事が出来て、とても良い経験になりました。

今回の留学を通して、どんな事も自分で実際にやってみることがとても大切だと感じました。実際に使ってみてわかる語学の楽しさや難しさがあり、経験してみても初めてわかる文化があるのだと思いました。韓国での経験を今後活かしていけるようにしたいと思います。また、豊かな留学生活を送る上で、友達や出会った人達の存在は不可欠なものでした。全ての人との出会いが、何ものにも代えがたい宝物になりました。私に数々のものを与えてくれた韓国と、これからも繋がりを持っていけるようにしていきたいと思います。

最後に、派遣留学の機会を与えてくださった二松学舎大学と派遣留学先である成均館大学校、そして最初から最後まで応援してくれた両親に心から感謝したいと思います。



クラスメイトと一緒に（筆者・右から2番目）

平成 25 年度 夏期中国語・歴史文化研修の報告

今年で第 17 回目を迎えた中国語・歴史文化研修は、8月8日から8月28日の3週間の日程で、海外協定校である北京大学歴史学系にて行われました。文学部、国際政治経済学部から計 14 名の学生が参加、毎年多くの学生が中国への短期留学を経験しています。



北京動物園にて

文学部中国文学研究科学科 3年

村澤 菜摘

私は今回、夏期中国語・歴史文化研修に参加しました。中国最高峰の北京大学で学んだことは、かけがえのない貴重な体験となりました。私は今回の研修で重要だったのは多くの方との交流であったと感じています。そこで、今回の研修を交流という点から3つに分けて感想を書いていきたいです。

まず、私たちのクラスを担当してくださった林承節先生との交流です。先生はとても優しく根気強い指導で授業にあたってくださいました。午前の授業では教科書を使って授業を行い、最後の20分は、教科書を使わず口語練習を行いました。この時間はひとりずつ昨日の出来事や感想を話し、そのことに対して他の人が質問をします。話したいことはたくさんあるのに、うまく表現できないもどかしさと悔しさを感じながら、その悔しさをバネに、次こそは！という気持ちで取り組むことができました。

2つ目に、自由行動の時に訪れた店員の方との交流です。私達は主に三里屯・王府井・前門で買い物をしました。安くできませんか？と交渉してみたり、なかなかうまくいかずその場を去ろうとしたときには、ちょっと待ってと引きとめられた承してくれたこともあり、値段交渉だけでなく、他愛のない会話を織り交ぜながらの買い物は、本当に楽しく勉強になりました。

3つめに、北京大学構内にあるスーパーや、食堂の店員の方との交流です。中でも「物美」というスーパーの中にある文具・生活用品の店員（江さん）との交流が印象に残っています。「物美」には初日から通っていたので、店員の方にもすぐに顔を覚えてもらえて、会うたびに色々なことを話すようになりました。日常会話以外にも、彼女が最近日本語を勉強し始めていることを聞いてからは、私は中国語で、彼女は日本語で会話をすることもありました。会話スピードの速さ、また辞書に載っていない流行語(?)を豊富に使う会話は、日本では決して経験できないことでした。

中国人との交流を通して、今まで持っていた中国のイメージががらりと変わりました。交通ルールや習慣など、日本では考えられないようなことも多々ありましたが、そのよう

に思っていたのは、きっと狭い価値観でしか中国を見ていなかったからだと思います。その点でも実際に中国に来て良かったと感じています。語学面でも、学んだ中国語がちゃんと伝わることに自信を持つことができました。しかしそれと同時に、気さくに話しかけてもらっても言いたいことがうまく表現できない、聞き取ることができないことも多く、本当に悔しい気持ちでいっぱいでした。

中国での生活は、例えるなら中国語を浴びているような感覚でした。この3週間で経験し、感じたことは、貴重な体験でもあり、楽しい思い出でもあり、今後の課題でもありま

す。今回の研修で得た知識や経験を今後に活かし、さらに上を目指して頑張ります。そして、もっと力を伸ばして必ずまた中国に行きます。



研修に参加した仲間と万里の長城にて（筆者・中央）

平成 25 年度 夏期オーストラリア語学研修の報告

オーストラリア屈指の名門大学であるクイーンズランド大学（ブリスベン市）附属語学教育機関（ICTE-UQ）において、8月17日から9月8日までの3週間、オーストラリア語学研修が行われました。本学では、前回西シドニー大学で行った語学研修（2002年実施）以来、約10年ぶりの英語圏での語学研修の実施となり、文学部、国際政治経済学部から計16名の学生が参加しました。

国際政治経済学部国際政治経済学科 4年 大久保 拓



バブでホストマザーの誕生日祝い（筆者・中央）

私は、オーストラリアのブリスベンにあるクイーンズランド大学で海外研修に参加しました。「将来、海外で働きたい」と漠然とした想いを胸に、これまで大学で多くのことを学ん

できました。しかし、自分の夢に対して具体性をもっていなかったせいか、日本で外国に関する勉強をしても、雲をつかんでいるような不安を抱いていました。そもそも、海外とは？英語圏に限らなければフランスやドイツ、中国だって海外です。文化や習慣、民族、宗教、国によって全然違いますし、自分は将来的にどの国で働きたいのか、それすらはっきりしていなくて、ぼんやりとしていたころ、今回のオーストラリア語学研修の話聞き、すぐに行こう、と決めました。

情報化社会で海外の情報は日本にしながら簡単に手に入るし、英会話教室に行けば外国人と会話できます。でも自分の足で現地へ向かい、自分の肌で、目で、鼻で、耳で、海外を感じたい、感じることでなにかが見えてくるのではないかと思います。結果として、将来にはっきりと、一筋の道をひくことができたのだと感じました。

今回のオーストラリア留学で私が特に経験できたキーワードは、「人」そして「英語」です。

オーストラリアの国土は広いですが、それに劣らないくらいオーストラリアの人たちの心も広いと感じました。私は Mom, Son, Daughter の3人家族宅にホームステイしましたが、何う前は正直不安ばかりでした。うまくコミュニケーションを取れるのか、文化の違いで失礼なことをしないかなどいろいろ考えていましたが、それはすぐ払拭されました。あちらの家族も初めて留学生を迎えるらしく、お互いぎこちない部分もありましたが、本当に温かく迎えてくれ、いろいろなところへ連れて行ってもらいました。現地の英語は速く、ほとんど聞き取れませんでした。そのたびにゆっくりと話してくれたので、多少は内容を聞き取ることができました。一度話した内容を、わざわざゆっくり言い直してくれる親切さに、感激しました。

積極的に現地の大学生に話しかけて、一緒に中庭でごはんを食べたりしましたが、見ず知らずの日本人とも嫌な顔せず、気さくにごはんを食べてくれるオーストラリア人からは、日本人特有の閉鎖的なものは一切感じず、話していて自然と温かい気持ちになれました。

次にオーストラリア留学の目的の一つに英語力の向上というものが私にはありました。わずか3週間ではありましたが、常に英語で話そうと意識することで、英語力を得ることができたと実感しています。私たちが通っていた大学は、設備の整った図書館や教室など教育施設はかなり充実しており、スポーツ施設もテニスコートや陸上トラック、プールまで何でもそろっていました。街の中心部や公園にも近く、落ち着いた雰囲気、立地条件もとてもよかったです。大学内の授業では何人かのグループを作り、オーストラリアについてプレゼンテーションをしたり、他国の人たちと英会話をしたり、現地の人たちに日本についてインタビューをしたりと、英語を学ぶ上では最高の環境が整っており、これまでにはない経験ができたと思います。市街地のクイーンズストリートモールへ買い物に行った時も、当然ながら看板から値札、メニュー、接客まですべてが英語で、右も左も英語だらけでした。英語に囲まれて逃げ場のない状態にいて、集中力が増して飛躍的に英語力がアップしましたし、英語を通じてその土地の文化や習慣を知ること、オーストラリアという国が本当に好きになったと思います。この経験は、何物にも代えることはできないでしょう。

以上、2つのキーワードを軸に留学を振り返りましたが、もちろんこれだけではなく、もっともっと楽しいことがたくさん詰まっていた。書ききれないほど中身の詰まった経験をしたことで、「将来海外で働きたい」という漠然とした夢から、「大学卒業後、オーストラリアで働く」というはっきりとした意志を固めることができました。将来について迷っていた自分にとって、これほどまでに有意義な3週間はありませんでした。



授業で現地学生とシティツアー（筆者・左から2番目）

交換留学修了報告

日本での留学について

中国・北京大学 李 宇恒

日本に来て約一年になります。この一年間に、私はさまざまなことを体験して、その体験は私にとって大切なこととなりました。

二松学舎大学に留学した際に、できるだけ日本語の勉強の授業を取りました。正直に言えば、留学する前に、日本語を勉強したことがあります。単語と文法を勉強しただけで、会話の機会がありませんでした。その為、日本に来たばかりの頃はとても大変でしたが、日本語の授業を取った後から、だんだんと会話をする自信ができました。

また、千葉県柏市に住んでいる時には、柏国際交流会に参加し、東京に来てからは文京区の日本語交流会と東京 YWCA が開催する「日本語のお母さん」というイベントにも参加しました。私の日本のお母さんは、米田かがりさんという方で、とても優しく元気な人です。米田お母さんは、私をつれて美味しいものを食べさせてくれたり、浴衣を着せてくれたり、面白い所に連れて行ったりしてくれました。

それ以外では、日本の四季の美しさを鮮明に感じました。秋になると、友達と一緒に京都へ紅葉狩りに行きました。秋の京都は紅葉でいっぱいでした。そして、清水寺や金閣寺で和服を着た女性の姿をはじめて見ることができ、とても嬉しかったです。それ以降、日本文化への興味を持つようになりました。

冬に、東京に白い雪が降りました。日本に来る前は、東京はあまり雪が降らないと聞いていましたが、今年の1月14日に初雪を見て、雪が降ると、東京もまるで雪国になったような気がしました。

冬が過ぎ、暖かい春が来て、どこでもきれいな桜を見ることができました。五年前に中国の玉淵潭公園で桜を見たことがありましたが、中国の桜は主に白い桜で、花も少ないです。



日本で親しくなった米田家族の皆様と（筆者・右）

私はお花見が大好きなので、東京の桜の名所にほとんど行きました。たとえば、上野公園、隅田川公園、靖国神社、千鳥ヶ淵、北之丸公園と中目黒川などです。特に、中目黒川の桜並木はすばらしく綺麗でした。世界にはいろいろな花がありますが、あの桜を見た時から、日本人がどうして桜を最も愛しているのかが分かりました。満開後一週間くらいで散り始め、その桜吹雪は思った以上に美しかったです。

夏には梅雨がありますが、天気予報で「梅雨が明けると花火が始まる」と聞き、6月から花火を見るのを待ち望んでいました。梅雨が明け、7月に横浜、お台場と隅田川で、すばらしい花火を見ることができ、日本は本当に良いところだと思います。

この一年の間に、いろいろな経験ができました。特に、日本人と接することにより、視野が広がった気がします。中国と日本には、似たような文化がありますが、考え方は全然違います。また、日本人の真面目さ、勤勉さに感動しました。歴史については、中国と日本は、立場によって意見も全く違いますが、歴史よりも現在と将来はもっと重要だと思います。さらに、世界中の人と人との感情が一番大切だと思います。お互い、勝ち負けは歴史の問題にすぎないでしょう。

日本での一年間は、想像以上に勉強になりました。

日本留学の感想

台湾・中国文化大学 張 楷培



時間が経つのは早いもので、もうすぐ一年の留学生在活が終わる。今思えば、最初日本に来た時と今を比べると、自分は本当に成長した。日本に来たばかりの頃は、ほとんどの日本語が聞き取れなかったが、今は大体分かるようになった。楽観的な僕でも、日本での生活で、たまに空虚感に襲われるけど、先生方と日本の友達がいろいろ助けてくれ、その空虚感も薄れた。本当に有難かった。

僕が日本に来る前は、特に高い目標がなく、ただ日本語能力試験合格だけを目標にしていた。その他は良い思い出を作りたいだけだった。今まで、何だかんだ言って、現状で満足していた。唯一の希望はもっと長く日本にいたいということだけだ。でも、それは有り得ないことだ。

人との出会いは本当に不思議だ。日本に来て、「縁」というものを実感した。日本人の友達や中国人留学生の友達と出会ってから、いろいろな良いことがあった。さらに、日本人と日本語の練習をして、多くの若者言葉も学び、日本の若者言葉に興味を持つようになった。

二松学舎の中国人留学生は皆優しくて、いろいろと助けて

くれた。食事の時も、皆が一番美味しい料理を、僕の為に残してくれるとか、優しく世話をしてくれた。初めて中国人と交流する僕は本当に感動した。

感謝したい人は、数えきれないほどいる。皆との出会いは、僕に楽しい留学生活を与えてくれた。特に、日本の生活を始める時に、いろいろ案内してくれた先生や友達、彼らのおかげで、日本の生活がうまくいくようになった。

小さい頃から、行きたかった富士山やディズニーランド、東京の色々な所にも行った。東京以外では、北海道、京都や東北など、日本の文化に浸ることができ、自分の価値観も柔軟に変わった。日本の礼儀正しく、マナーが良い環境の中で、僕の他人とのコミュニケーションもスムーズになった。

留学生の僕にとって、母語以外の環境の中で、言葉の面での困難が沢山あり、最初は本当に衝撃を受けた。しかし、自分の持っている考え方を考え、僕は留学生だから、勘違いやできないことは必ずあると考えるようになってから、次第に失敗を経験として、自分に対して、「大丈夫だ、他の人に笑われたことがあっても、今度絶対もっと上達する」と言えるようになった。

二度はない人生、この一年の留学生活は僕の心の中でいい経験になった。

もしチャンスがあれば、再び日本で暮らしたい。



日本で知り合った友達と（筆者・後列左）

充実した留学生活

台湾・中国文化大学 劉雨瑄



今年の八月に二松学舎大学での交換留学生生活が終わります。この一年間でさまざまなことを経験しました。日本語の上達だけではなく、自分自身も成長できたと思います。留学前はこれから日本で生活ができるのかと不安でしたが、実際に日本で生活を始めると、いつの間にか不安もなくなり、今はもっと日本にいたいと思う気

持ちになりました。

昨年九月に二松学舎大学へ来て、最初は授業選びに混乱してしまいました。文学部に在籍しましたが、本国では文学部生ではないので、文学部の授業は私にとってとても難しいと思い、単位をとれそうな授業や興味がある授業を取りました。その中で一番好きな授業は「日本語①（古典）」です。古典と聞いて、元々は難しいと思っていたのに、いろいろな古典知識と古典文学作品を勉強して、面白くなりました。

勉強だけではなく、いろいろなイベントに参加し旅行もしました。十月末、大学の留学生たちと一緒に山梨の日帰り旅行をしました。時間は短くても、幸せな時間を過ごしました。

また、高校生との交流会にも参加しましたし、外国人留学生日本語スピーチコンテストにも参加しました。交流会やスピーチコンテストに参加するのは初めてなので、とても緊張しましたが、無事に終了し、とても楽しい時間を過ごしました。

個人では、二度関西へ行きました。中国文化大の親友に会いに行って、一緒に大阪、京都、神戸などで遊びました。ゴールデンウィークの期間に、日光と富士急ハイランドへも行きました。私は留学期間中にやりたかった日本国内旅行ができて、本当に幸せだと思いました。

また、日本は台湾と違い、四季がはっきりしているので、紅葉、雪、桜、花火を見たいと思っていました。秋には、京都へ行って紅葉を見ました。冬には、東京でも降る雪を見ることができました。春になると、上野恩賜公園や井の頭恩賜公園や千鳥ヶ淵へお花見に行きました。桜は台湾でなかなか見られないので、私も初めて見ることができ、美しく素晴らしい体験だったと思います。そして、夏には華やかな花火とお祭りがあり、私も浴衣を着て、花火大会やお祭りなど見に行くつもりです。とても楽しみです。

交換留学をしたことで、少し残念なこともあります。今は四年生なので、台湾の卒業式に出られないことや、先生方と



温泉の後の夕食

一緒にパーティーに出られないことなどです。悲しいけれど、私はほかの四年生とは違い、外国生活を体験しました。華やかな留学生活とは言えませんが、いろいろな経験を積むことができました。これからの私は、帰国しても、日本で学んだことをしっかりと活かしていきたいと思っています。

平成25年度交換留学制度

交換留学とは、「二松学舎大学交換留学に関する規程」に基づく、海外協定校への1年間の派遣留学です。本学では協定校のうち、中国 北京大学、韓国 成均館大学校、台湾 中国文化大学、オーストラリア シドニー工科大学の4校に留学できます。協定校によって派遣条件が異なります。詳細は「海外留学の手引き2013」を参照ください。

派遣留学生紹介 (平成25年10月～平成26年9月)

◆中国 北京大学

文学部中国文学科3年 喜島 千晴

◆台湾 中国文化大学

文学部中国文学科4年 松田 春呼

文学部中国文学科4年 間宮 美喜



学長、国際交流センター長と派遣及び交換留学生

交換留学生紹介 (平成25年10月～平成26年9月)

◆中国 北京大学



劉 千里

◆台湾 中国文化大学



涂 智宇



梁 苙翔

国際交流センターからのお知らせ

国際交流センター実施予定行事 詳細は随時掲示します。

第2回TOEFL-ITP (団体割引でのTOEFL受験)

日 程 平成25年11月30日 (土) 場 所 九段キャンパス1号館702教室

試験結果は、本学協定校シドニー工科大学への交換留学制度に応募する際の選考対象となります。

第10回外国人留学生日本語スピーチコンテスト

日 程 平成25年12月7日 (土) 場 所 九段キャンパス1号館507教室

「外国人留学生日本語スピーチコンテスト」もすっかり恒例となりました。出場者の皆さんは、練習に練習を重ね、毎年様々なパフォーマンスを見せてくれます。多くの方々のご来場をお待ちしています。

国際交流年末懇親会

日 程 平成25年12月7日 (土) 場 所 九段キャンパス13階ラウンジ

父母会の助成を受けて国際交流年末懇親会を開催しています。留学生の皆さん、楽しい時間を過ごしなが、新たな1年の抱負について語り合しましょう。

編集後記

◇4月に文学部の武永尚子教授が、国際交流センター長に就任され、新たな国際交流の活動が始まりました。吉崎一衛前国際交流センター長には大変お世話になりました。

◇今年度10月に留学を開始した派遣留学生は、珍しく全員が女子学生、交換留学生は全員が男子学生でした。留学の楽しさ、辛さを経験して、来年の留学終了時にはさらに成長した姿を見せてくれることでしょう。

◇本誌へのご意見・ご感想をお寄せください。

E-mail : icenter1@nishogakusha-u.ac.jp